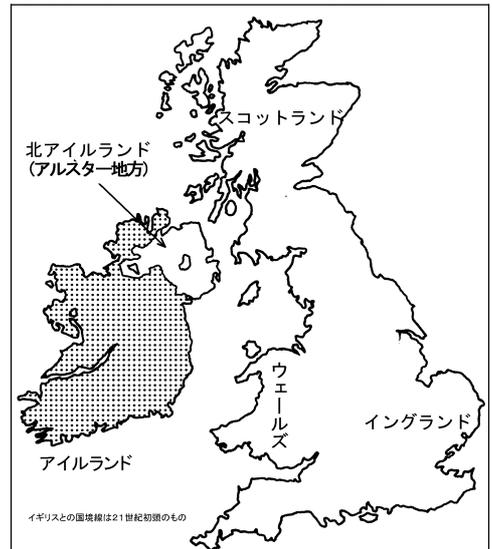


アイルランドのナショナリズム

大英帝国の繁栄、規制緩和、選挙法改正などについてはNo.129参照。

- 1) 法的には1603年以降、両国は同君連合だったが、実質上、アイルランドは1649年、【9: 】に支配されて以来、イギリスの植民地にされた。イギリスは18世紀末、アイルランドに独自の議会を認めたが、イギリス系のプロテスタントの地主が支配していた。産業革命後は、イギリスに移住して労働者になる者も多く、イギリスでは彼らに対する暴動も発生している。
- 2) ウェールズは既に13世紀にイングランドに合併された。1707年、アン女王の時にイングランドとスコットランドが合同してグレートブリテン王国となった経過と、以下の史実との混同に注意せよ。
1801年、イギリスはアイルランドを併合し、国名も【10: 】となった。住民はカトリックだから弾圧された。
1829年まで※カトリック教徒には【11: 】さえなかった。1881年まで土地所有者となることもできなかった。
※カトリック教徒解放法(1829)



- 3) 1828年、【12: 】廃止。これには【13: 】1775-1847らの運動があった。彼はアイルランドの政治家で1828年に下院に当選したが、カトリックであったため当選を拒否され、1829年のカトリック解放法成立で、はじめて下院に入った。
- 4) 1845～46年【14: 】が起き、アイルランド農民の苦難は続いた。ジャガイモの病気を原因とする凶作で、アイルランド人、百万人が死亡した。イギリス人によって土地を奪われたアイルランドの農民は小作農として麦の収穫のほとんどを小作料として納めていた。麦畑の間の僅かな土地に栽培するジャガイモが彼らの唯一の食料だった。数種類の品種を栽培してリスクを分散するどころではなかった彼らは単一品種のみを栽培し、それが病気になった。ジャガイモが全く収穫できないのに地主たちは麦の納入を強いた。目の前に食料があるのに、飢えて死んでいった。この時多くの移民がイギリスやアメリカに渡った。ケネディもこの時アメリカに渡った移民の子孫である。ビートルズの4人のメンバー中3人もこの時リヴァプールに渡った移民の子孫である。
- 5) 1848年【15: 】は、武装蜂起したが鎮圧された。
1858年 秘密結社フェニアン結成 独立を要求
1870年 グラッドストーン内閣 (自由党) 土地法制定 アイルランド人小作人の権利を認める法律
1886年 グラッドストーン内閣 (自由党) アイルランド自治法案提出 イギリス人地主の反対で不成立
この時、**ジョセフ=チェンバレン** 1836-1914 はアイルランド自治法に反対して自由党を離れた。保守党に移り、植民地相 任1895-1903 時代、帝国主義政策を推進して南アフリカ戦争を引きおこした。ナチス・ドイツへの融和政策で知られるネヴィル=チェンバレン首相は子息。第6代ケープ植民地首相セシル=ローズ 任1890-1896 との混同に注意。銃を背に両手に電線を持ってカイロとケープタウンを両足で踏む風刺画に描かれているのはセシル=ローズ。
- 6) 19世紀後半より、アイルランドではイギリスからの自治ないしは独立を求める運動が激しくなる一方で、アルスター地方を中心としてイギリスとの連合を維持しようとする勢力もあり、両者の衝突が続いた。1914年9月、【16: 】がイギリス下院で成立したが、第一次世界大戦の勃発で凍結された。
- 7) 1916年、独立派が「アイルランド共和国樹立」を宣言し、1916年4月、シン=フェイン党の支援を受けて「【17: 】」を起こすも鎮圧された。
1918年の総選挙で独立を主張する民族主義政党、【18: 】(1905年結成)が勝利し、1919年に独立戦争が始まった。1921年、南部26州(南アイルランド)はイギリス国王を元首とする同君連合国家「アイルランド自由国」として分離独立(首相デ=ヴァレラ)、1922年イギリスもこれを承認した。1931年の**ウェストミンスター憲章**によりイギリス連邦の一員となっていたが、1937年、イギリスが連邦王国からの独立も承認、新憲法が公布され、国名を【19: 】と改称、共和制に移行した。1949年にイギリス連邦からも離脱した。
- 8) 独立時の経緯によりアイルランド島の北東部、北アイルランド6州(アルスター地方)はイギリスの統治下にあるが、エールは1998年のベルファスト合意以前は全島の領有権を主張していた。1973年にはEC(現在EU)に加盟した。北アイルランドではアイルランドへの帰属を求めてテロ行為を繰り返す過激派IRAなどナショナリストとユニオニストとの紛争が起こっていたが、平和プロセスが進み、北アイルランド紛争は1998年4月、ベルファストにおいてイギリスとアイルランド間で【20: 】が成立し、イギリスとの関係継続を求める立場のプロテスタント系住民と、南のアイルランド共和国との合同を求めるカトリック系住民双方が参加する自治政府(北アイルランド議会)が設置された。エールは【20: 】で北東部、北アイルランド6州の領有を放棄。

もうひとつの「血の日曜日事件 (Bloody Sunday)」※

それは、1972年、北アイルランドのデリー(ロンドン=デリー)で起きた。1968年、北アイルランドではイギリスの支配に反対する公民権運動が起こり、1972年1月、イギリス軍が介入、公民権協会による平和的なデモに発砲、14名のカトリック市民がイギリス兵士に射殺された。この事件にはアイルランド共和国も激怒、ダブリンのイギリス大使館が焼きうちにあい、各地で抗議デモや報復、大混乱が多発した。これを契機にイギリスによる北アイルランドの直接統治が始まる。

楽曲『私の愛した街』(訳詞 横井久美子 原訳 平井則之 アイルランド抵抗歌)はこの事件のことを歌っている。また、有名な『ロンドンデリーの歌』は『Danny Boy』など様々な歌詞を付けられ、賛美歌としても有名で、英領北アイルランド(アルスター地方)の事実上の国歌である。著作権の関係上歌詞を掲載できないが、これらはYouTube等で試聴できる。

※ 世界史で頻出の本来の「血の日曜日事件」とは、1905年1月22日に、ロシア帝国の首都ペテルブルクで起きた。修道士ガボンに率いられた民衆の平和的な請願デモに軍隊が発砲、死傷者2000名を出した事件。